

## 私と『三国志演義』研究（上）

井 上 泰 山

筆者は復旦大学からの要請を受け、2007年5月、同大学の古籍整理研究所において、「『三国志演義』と日本文化」というテーマのもとに、中国語による4回の連続講義を行った。各回の日程と具体的な演題は以下のとおりである。

- 第1講：5月8日(火) 14:00～16:00 「私と『三国志演義』研究(上)」
- 第2講：5月10日(木) 9:00～11:00 「私と『三国志演義』研究(下)」
- 第3講：5月15日(火) 14:00～16:00 「日本人と『三国志演義』」
- 第4講：5月16日(水) 19:00～21:00 「国外流出資料の発掘と中国学の新展開」

本稿は、第1講の内容を日本語によって記録したものである。第2講の内容は本誌第57巻第4号に掲載する予定である。第3講については、次年度に中国の学術誌に掲載されることが決まっている。また、第4講の一部は、日本中国学会講演録『中国学への提言』（2007年3月31日発行）に収録されている。

毎回の講義は復旦大学の研究拠点「光華楼」の「西主楼1615室」で行い、90分の講演の後、30分程度の質疑応答が行われた。来聴者は毎回およそ40人、古籍整理研究所の専任教員の他、大学院生や学部の学生なども聴講していた。なお、講演の概要については、5月10日付けの新聞『東方早報』文化欄にも紹介記事が掲載された。

## 一 はじめに

### (一) 復旦大学と関西大学の交流

ただいまご紹介いただきました井上泰山です。今回、歴史と伝統のある復旦大学古籍整理研究所でお話させていただく機会を得ましたことを大変名誉なことと考えております。このような機会を作ってくくださった、古籍整理研究所所長の章培恒教授にまず心から感謝の意を表したいと思います。また、以前から中国古典文献学に関する著書によって多大な学恩を蒙り、今回実務的な面で連絡役を引き受けていただいた陳正宏教授にも、併せて感謝の意を述べさせていただきます。

私自身の経歴につきましては、先程、章培恒先生からご紹介いただいたとおりですが、それ以外の幾つかの点についても、本題に入る前に簡単にご紹介しておきたいと思います。

私は現在、大阪にあります関西大学の文学部において、中国古典文学に関する授業を担当しております。早いもので、大学の教壇に立って、今年で28年目に入りました。専門は、元代の雜劇を中心とする中国古典戯曲文学ですが、後で詳しくお話いたしますように、ふとしたきっかけから中国の古典小説にも興味を抱くようになり、結局、近世の戯曲と小説、両方の分野を並行して研究する形で、現在に至っております。

私が勤務しております関西大学そのものについては、あまり詳しくご紹介する必要もないかと思いますが、復旦大学とは以前から学術交流に関する協定を結んでおりますので、これまでも交換研究員や留学生を通して様々な交流が行われてきたことは、多くの方が既にご承知のことと思います。古籍整理研究所の陳正宏教授も、かつて半年間、関西大学文学部で交換研究員として研究に従事されましたし、同じく錢振民教授も昨年度、同様の資格で研究に従事されました。また、一昨年(2017年)の10月に開催されました貴学の開校100周年記念行事には関西大学学長河田悌一教授も参加されましたし、逆に、昨年秋(2016年)に関西大学で挙行されました関西大学創立120周年記念シンポジウムには、大変お忙しい中、

章培恒先生に遠路はるばるお越しいただき、中国国内における中国文学研究の進展に関する貴重な講演をしていただきました。この場をお借りして、改めて感謝申し上げる次第です。

## （二）章培恒先生との出逢い

復旦大学と関西大学はこのように長い交流の歴史をもっておりますが、今回私がこの場において『三国志演義』に関する話をさせていただくことになったことについては、実はもう一つの経緯がございます。話はやや個人的な事になりますが、私は、実は大学間の交流が始まる随分前から、所長である章培恒先生にお会いする機会に恵まれておりました。と申しますのは、章先生は1979年から80年にかけて約1年間、神戸大学に政府派遣の招聘研究者としてお越しになり、そこで中国小説史の講義をなさいました。ちょうどその頃、私は関西大学大学院博士課程の学生でした。当時私は、元曲研究家として著名な、京都大学名誉教授・田中謙二先生のもとで元雑劇に関する指導を受けておりましたが、章培恒先生が神戸大学において中国小説史の講義を開始されることを耳にして、早速、指導教授である田中謙二先生にお話しましたところ、ただちに、章培恒先生の生の講義が聴けることなど滅多にない好い機会だから是非聴講しに行くように、との許可をいただきました。そこで、毎週1回、その当時京都大学の助手をしていた友人の金文京氏とともに、六甲駅から徒歩15分ばかりのところにある神戸大学に通って、章培恒先生の小説史の講義を拝聴いたしました。聴講者は神戸大学の学生・院生および外部からの聴講生合わせて、全部で10数名だったように記憶しております。79年10月26日から80年3月まで、半年間にわたって行われたその講義に、私は毎回欠かさず出席いたしました。学部および大学院時代を通じて、中国の古典小説だけに限定した講義を聞いたことのなかった私にとって、それは非常に新鮮で刺激的なものでした。なかでも、未だに忘れられないのは、毎回の講義の際、章先生が、参考書や講義ノートの類を殆ど見ることもなく、資料の原文をスラスラと黒板に板書されたことでした。必要な資料については、関連部分を殆ど暗記するまでに準備した上で講義

に臨まれていたのだと思います。当時の講義内容は、全て録音してありまして、私は今でも時折聞き直しては先生の「警咳に接して」いる次第です。また、聴講させていただいたせめてもの御礼の意味を込めて六甲駅近くの居酒屋でささやかな感謝の会を開いた際、外部からの参加者に過ぎない金文京氏と私との質問に懇切丁寧に答えてくださったばかりか、当時進めていた「花関索伝」の研究に関して色々とアドバイスをしてくださったのを、いまでも懐かしく思い出します。

以上申し上げましたように、章培恒先生は私にとって、学生時代から現在に至るまで28年間、一貫してご指導を仰いでいる「師」でありまして、今回こうしてお招きいただきましたのも、そのような長いご縁があったればこそのことであろうと、今更ながら、偶然にもせよ、学生時代に章培恒先生の講筵の末席に連なることができたことに対して感謝している次第です。

### (三) 日本の大学と研究環境

本題に入る前にもう少し前置きをさせていただきたいと思います。先程申しましたように、私は現在、関西大学で主に中国古典文学を教えております。日本の大学はその殆どがそうですが、教員は学部と大学院の両方で教えるのが一般的でして、私も、学部の1年生に初級の中国語も教えますし、一方で大学院の博士課程の学生に対して元雑劇や明代の小説に関する講義などもいたします。1週間あたりの担当コマ数は毎年かなりの数に達し、多い年は10コマ、少ない年でも最低6コマか7コマ程度は担当しなければなりません。しかも、日本の大学の1コマは90分授業で、途中休憩はありません。これは私だけの状況ではなく、多少の差はあっても、私の同僚は皆、ほぼ似たような環境に置かれています。従って日々の講義をこなすだけでもかなりの時間をとられますし、その他にも様々な学内の業務が重なって、やや大げさに言えば、日々「忙鬼」に追いまかれる状況でして、春と夏の休暇期間以外には、まとまった研究時間をとりにくいのが最大の悩みです。特にここ数年間、学生数が激減する、所謂少子化の影響を受け、日本の大学を取りまく状況は大変厳しいものがありま

す。今年中に国立大学は全て法人化される予定ですし、それに伴って私立大学も経済的に少なからぬ影響を受けつつあります。私は関西大学に勤務して既に22年目に入りましたが、先程お話したような状況ですので、専門分野の研究に関しては、自分で満足できるだけの十分な成果もあげられずにおります。従って、このような場で専門の方々を前にして『三国志演義』についてお話するのも少々気が引けるのですが、しかし、これからお話することの中には、ふとした偶然が機縁となって、学界に対して多少の貢献ができたのではないかとと思われる部分も幾つか含まれておりますので、章先生のご好意に甘える形で、敢えて貴重なお時間を頂戴したような次第です。

#### （四）日本における中国文学研究者のタイプ

ところで、私の見るところによりますと、およそ日本の大学で中国の文学を教えている教員には、大きく分けて二つのタイプがあるように思います。一つは、自分の生まれ育った家が代々学者の家系で、自分自身も当然、学界に身を置くことを期待されて育てられた人々。もう一つは、学問とは全く関係のない家に生まれ、就学の過程でたまたま学問の世界に興味を覚えて研究の道に進んだタイプ。前者に属する人々は、父親または祖父が既に多くの書物を所蔵しておりますので、幼い頃から書物に囲まれて育つことになります。早くから様々な情報に囲まれて育つわけですから、研究者としての道を歩む場合にも、かなり有利な点があるように思われます。以前に比べると最近はあまり言わなくなりましたが、それでも日本では未だに「書香の家柄」という言葉が生きています。「書香の家柄」に育つ、ということは、書物に親しむ環境が早くから整っていることを意味します。後で話題に出しますが、日本の『三国志演義』研究に先鞭をつけられた小川環樹先生などは、日本でも有名な、典型的な「書香の家柄」の出身であります。ご父君の小川琢治氏は著名な中国歴史地理学者でありましたし、環樹氏以外の二人のご兄弟はいずれも、ノーベル賞を受賞した物理学者であったり、有名な歴史学者であったり、一般に「三樹」の名で呼ばれる、国内外に広く知られた存在です。

(五) 私の生い立ち

日本ではあまり言わなくなった「書香の家柄」などという言葉を持ち出しましたのは、他でもなく、私自身は全くそのような環境で育った人間でないことをお伝えするためでもあります。私自身は日本の本州の西の端に位置する山口県下関市の出身ですが、実家は先祖代々農業と林業を営んでおりまして、山林や田畑などの不動産はある程度所有しておりましたが、学者の家系というわけではなく、およそ書物とは無縁の環境に生まれ育ちました。父親は元来農家の長男として生まれましたので、当然実家を継いで農業に従事しておりましたが、ある時期から、私の大学進学費用を捻出するために路線バスの運転手をも兼ねるようになり、早朝から夜遅くまで大変忙しく働いてくれました。そんな環境に生まれ育ちましたので、私自身が中国語を習い始めたのも勿論大学に入ってから、ということになります。幼少の頃から「漢学」に親しんでいた人々と比べると、文字通り「晩学」の名にふさわしいスタートでありました。

少々余談になりますが、私の名前が「泰山」であると知った中国の方は、往々にして、私が中国の山東省あたりの出身ではないかと疑っておられるようですが、実際はそうではなく、私は日本で生まれた日本人で、泰山という名前も、安泰なる山が故郷にあれば水脈が涸れることはなく、従って生活も安定する、という願いを込めて父親が命名したものです。また、私の名前を初めて耳にした日本人からも、しばしば、君の父親は書道の大家か、それとも漢文の先生か、などといった質問を受けますが、父親の職業がそのいずれとも全く関係がないことは既にお話したとおりです。それはともかく、私自身は先程申し上げた二つのタイプのうちの後者、すなわち、学界とは何の関係もないところから突然この世界に足を踏み入れた、いわば全くの新参者ですので、実家には書物とよべるような書物はなく、まして中国の古典に関する書物などは全く所蔵していませんでした。従って、小川環樹先生のように、幼少の頃から『三国志演義』の翻訳を読んだような経験もありません。『三国志演義』の書名をいつ頃知ったかということについても、確かな記憶はありませんが、本格的に読み始め、興味を覚えたのは、一般の日本人と較べてもかなり遅く、大学に入ってから

ことで、大学の中国文学史の講義で『三国志演義』の存在を知り、ある程度中国語の原文で読めるようになった時点で、その魅力に取り憑かれたように思います。

## 二 私と「花関索」研究

### （一）講演のテーマについて

さて、随分と前置きが長くなってしまいましたが、このあたりで、いよいよ本題に入りたいと思います。今回用意いたしましたテーマに関してですが、章培恒先生から承っておりますところでは、今回は「『三国志演義』と日本文化」といったテーマでお話することになっております。ただ、このままではテーマが大きすぎて、つかみ所がないように思われますので、私としては、今後4回に分けて、もう少し具体的なテーマに絞ってお話したいと考えております。第1回目と第2回目は、「私と『三国志演義』研究」という演題をつけました。3回目はもう少しテーマを拡げて、「日本人と『三国志演義』」というテーマのもとにお話する予定にしております。そして、最終回となる第4回目には、私が一昨年の4月から半年間にわたって行いました、西欧諸国、特にスペイン・ポルトガルにおける漢籍調査の様子と、それによって得られた成果の一部などもお話できればと考えております。テーマは、「国外流出資料の発掘と中国学の新たな展開～イベリア半島における漢籍調査を基にして～」です。このテーマは、「『三国志演義』と日本文化」という本来のテーマとは直接関係のない話ではありますが、しかし、明代に刊行された白話文学の資料が西欧にどのくらい流出し、現時点でどのような書物がどのくらい保存されているか、といった点を考えることは、今後白話文学研究を押し進める上においても非常に重要な側面を持っていると思われまして、今回のテーマと多少関連する部分もありますので、できればその点についてもお話する時間を頂戴できればと願っております。

そんなわけで、今回と次回は、「私と『三国志演義』研究」というテーマのもとに、現在までの私自身の『三国志演義』との関わりをご紹介します。日本

における最近の『三国志演義』研究の動向にも説き及ぶことができればと思います。

具体的には、次の二点にポイントを絞ってお話します。一つは、関羽の第二子、あるいは第三子とも言われる「関索」研究に携わった経緯と、共同研究の成果として『花関索伝の研究』を出版するまでの過程。もう一つは、「関索」研究の過程で改めて注目され始めた『三国志演義』の版本に関する研究の一環として、スペインのエスコリアル宮殿に『三国志演義』の貴重な版本が保管されているという情報を得、関西大学から派遣されて調査のためにスペインに赴き、幸運にも『三国志通俗演義史伝』8巻を日本に持ち帰って翻刻本を刊行するに至るまでの経緯です。『三国志演義』に関して私自身が関わった部分をお話することによって、日本における『三国志演義』研究の一面をお伝えしたいと考えます。

## (二)「関索」との出逢い及び『花関索伝の研究』の刊行

それではまず、私と「関索」との出逢いについてお話したいと思います。私は1980年3月に関西大学の博士課程を修了した後、幸運にもただちに東京の明治学院大学というキリスト教系の大学に職を得ることができ、そこで通算6年間、現代中国語を教えました。ちょうどその頃、京都の田中謙二先生のご自宅で定期的に行われていた元雑劇研究会で知り合った金文京氏が、京都大学の助手を辞して、母校である慶応大学の文学部に助教授として赴任してきており、同じ東京に就職したのも何かの縁だから一緒に中国の白話文学を研究しようということになりました。始めは京都の読書会に倣って元雑劇の作品を読んでいたように思いますが、そのうちに、書店を通して、中国で何やらとてつもなく重要な白話文学資料が出版されたらしい、というニュースが飛び込んできました。早速入手してみると、それは、1967年（一説に1964年）に上海市の郊外で発掘された明代成化年間（1465～1487）の『説唱詞話』14種（11冊）と、刊行年不詳の『白兔記』の刊本でした。『説唱詞話』14種のうち、刊行年の明らかなもので最も早いものは、成化7年（1471年）の「薛仁貴征遼故事」、最も遅



いものでも、成化14年（1478年）の「花関索伝（前集）」です。嘉靖年間以前の講唱文芸の資料がほぼ完全な形で発見されたわけですから、これは白話文学研究資料としては第一級の貴重な資料ということになります。

1973年に上海博物館から影印出版されたこの『明成化説唱詞話叢刊』は当時の日本円にして約8万円くらいだったと記憶しています。豪華な装幀を施されているだけあって予想外に高価なものでしたが、ともかくそれを個人的に一部買い求めました。当時の私は、勉強不足から、新発見の資料である『説唱詞話叢刊』がどの程度の重要性を持つものなのか、まだはっきりとは認識できずにおりましたが、友人の金文京氏はとっくにその価値を見抜き、当時東京に集まっていた大木康氏（現東京大学東洋文化研究所教授）、古屋昭弘氏（現早稲田大学文学学術院教授）にも声をかけ、合計4人で早速読書会を開始しました。読書会は1983年4月から84年7月までのおよそ1年3ヶ月にわたって行われましたが、膨大な数に達する誤字脱字の類に悩まされながらも、何とか一通り読み終えた私達は、この貴重な資料を日本の学界に紹介すべく、その校訂本を出版するための準備を始めました。その後さらに数年間の準備期間を経て、金文京氏の詳細な解説や大木康氏による関連資料集、さらには、途中から読書会に加わった氷上正氏（現慶応大学総合政策学部教授）の作成した語彙索引などを付して校訂文とともに刊行したのが、1989年に汲古書院から出版した『花関索伝の研究』でした。

### （三）『説唱詞話花関索伝』発掘以前の「関索」研究

私と「関索」との出逢いは以上のような経緯によるものでしたが、実は、この「関索」の名称自体は、『説唱詞話』が発掘される以前から、日本と中国双方の専門家の間では広く知られていました。詳しくは本稿の末尾に付した「関索・花関索関係文献目録（稿）」をご覧くださいと思いますが、例えば、中国では1939年に余嘉錫氏が「宋江三十六人考実」の中で「賽関索」の綽名をもつ『水滸伝』の英雄「楊雄」について触れていますし、また、1943年には王古魯氏も「小説瑣記」（『芸文雑誌』1巻6期）の中でその存在に触れています。

さらに、1951年には周紹良氏による「関索考」と題する専論も書かれています。

一方、日本で「関索」の名前に注目した最初の人物は、先程紹介した、京都大学の小川環樹氏でした。小川氏は戦後まもなく、1953年から『三国志演義』の「毛宗崗本」を日本語に翻訳する仕事をしておられましたが、その過程で幾つかの『三国志演義』に関する注目すべき論文を発表され、日本における本格的な『三国志演義』研究の先駆けともなりました。それらの論文のうち、「関索」に関わるものとしては、1964年に岩波書店から刊行された翻訳本の第8冊目に付載された「関索の伝説そのほか」と題する考察が挙げられます。ここで、小川氏の論文の内容について簡単に紹介しておくことにします。

#### (四) 小川環樹氏の「関索」研究

一般に、中国の古典文学作品を日本語に翻訳するにあたっては、それ以前に翻訳されたものがあればまずそれを参照するのが通例でして、小川環樹氏の場合も、江戸時代に湖南文山によって翻訳された『通俗三国志』と題する旧訳を参照されたようです。その湖南文山訳によれば、六編の卷之四、諸葛孔明が南蛮征伐に出かけようとする場面に、突如として「関索」と名乗る人物が現れ、関羽の二男であるという自らの素性を明かして南蛮征伐に従軍することになります。ところが、ご承知のように、現存する最古の『三国志演義』の版本である嘉靖元年の序文をもつ所謂「嘉靖本」には、「関索」という人物は全く登場しません。「嘉靖本」には、関羽の息子として、関平と関興の二人だけが登場します。このように、一部の『三国志演義』の版本にのみ突然登場する「関索」という人物に、小川環樹氏は少なからず興味を覚えられたようで、その後、日本国内にある幾つかの異なる版本を調査して、「関索」なる人物の実態を明らかにしようと試みられました。その結果わかったことは、「関索」なる人物の登場の仕方には二種類あり、それによって版本の系統にも違いがあるらしい、ということでした。すなわち、12巻本系の「周曰校刊本」及びそれと同系統に属すると判断される「李卓吾批評本」、あるいは清代の通行本である「毛宗崗本」などでは、「関索」は諸葛孔明の南蛮征伐の直前に突然現れるのに対して、現

在の福建省で刊行されたと思われる20巻本系の「余象斗本」や「鄭少垣刊本」、あるいは「楊閩齋刊本」においては、「花関索」と名乗る若者が、荊州を守っていた関羽のもとに母親胡氏とともに現れ、かつて生き別れた経緯を述べて関羽に認知を迫り、話を聞いた関羽が実子として認知して、以後従軍して度々軍功を立てる、という内容をもっていることを明らかにされたのです。この点を出発点として、小川氏はさらに、日本における最古の翻訳本である湖南文山の『通俗三国志』が、当時日本に伝来していた「李卓吾批評本」に依拠して翻訳された可能性が高いことをも論証され、それまで不明とされていた翻訳書の基づいた版本にも新たな光をあてられたのでした。

以上のように、小川環樹氏は、『三国志演義』の一部の版本にのみ、非常に不自然な形で登場する「関索」なる人物に少なからぬ興味と疑問を抱かれ、「関索」もしくは「花関索」と、版本によって人物名も微妙に異なることを突き止められたわけですが、当時は資料的限界に阻まれて、「関索説話」の詳しい来歴については疑問を残したままになっていました。

#### （五）金文京氏の「関索」研究

ところが、驚いたことに、その4年後の1967年に、上海の近郊にある宣氏の墳墓から、「関索」の素性を全面的に明らかにできる説唱詞話本『花関索伝』が出土したのですから、実に不思議としか言いようがありません。先程も申し上げましたように、1983年以降、私と金文京氏をはじめとする東京在住の5人のメンバーが集まって、この新たに発見された白話資料と日々格闘しつつあったのですが、メンバーの中の金文京氏は、いち早くこの資料の価値を認識し、解説を進めるかたわら、神話学、説話学、民俗学など、広範な視点を取り込んで各種の関連資料を渉猟し、一つの注目すべき論考を発表されました。1986年、岩波書店発行の雑誌『文学』に掲載された「関羽の息子と孫悟空」と題する長編の論文がそれです。以下、金氏の論考によって明らかになった説唱詞話『花関索伝』の資料的価値について簡単にご紹介したいと思います。その前に、『花関索伝』全4集の内容を簡単にご紹介しておく方が、その後の議論の展開

を理解していただく際に便利かと思われます。以下、金文京氏によって要約された『花関索伝』の概要を掲げておくことにします。

(六)『説唱詞話花関索伝』の概要

〔花関索出身伝〕前集

劉関張桃園結義の際、関羽と張飛は後顧の憂いを断つ為に、互いに相手の家族を殺すことにする。しかし関羽の家へ赴いた張飛は、息子の関平を殺さず自分の伴として連れ去り、夫人の胡金定をも逃がす。身重の体で実家の胡家荘に帰った胡氏は、十月経って男児を出産するが、その子は七歳の時の元宵節の晩に迷子となり、索員外なる長者に拾われる。やがて丘衢山斑石洞に住む道士、花岳先生の弟子となった子供は、九年後、岩の裂け目より流れ出た霊水を飲んで怪力を身につけると、下山して母を尋ねる。母は耳の後の瘤によって子を認め、子は花岳先生と索員外の姓をとって花関索と名乗る。おりしも太行山の盗賊が襲って来るが、花関索は父の残した槍を手に賊を破り、その頭目十二人を手下とすると、母を伴い、父を尋ねて旅に出る。道中まず鮑家荘へ立ち寄り、鮑三娘なる武芸の達者な娘と試合をし、これを打ち負かして妻とする。

〔花関索認父伝〕後集

鮑三娘には、もと廉康太子という婚約者がいた。廉は鮑三娘の結婚を知って怒り、花関索に闘いを挑むが、敗れて殺される。花関索は更に旅を続け、途中、芦塘寨の王桃、王悦姉妹を破って、この二人をも妻とし、やがて劉備らのいる興劉寨に到着、父関羽に会い親子の名乗りをあげた。その後、兄廉康の仇を討ちに来た廉旬を殺し、また劉備につきそって曹操の招宴に赴き、席上、劉備を害そうとする呂高天子を剣で撃殺するなどの手柄をたてる。

〔花関索下西川伝〕続集

劉備の西川攻略に従軍した花関索は、閬州の王志、巴州の呂凱、山賊の周覇、成都の周倉を次々と破り、西川全土を平定する。

〔花関索貶雲南伝〕別集

西川平定後、花関索は父と共に荊州城にとどまるが、ある日、劉備の子劉封

と酒席で争い、劉封は陰山へ、花関索は雲南へと各々配流の身となる。花関索の去ったあと、関羽は呉の陸遜、呂蒙の軍勢に攻められて戦死、その亡魂は、部下の張達に暗殺された張飛の冤魂と共に、劉備の夢中に現れ、非業の死を告げる。劉備は関羽の死を雲南の花関索に告げる使者を送る。花関索はおりあしく病気があったが、忽然と現れた花岳先生の秘薬によって、たちどころに平癒、早速軍を率いて呉軍と闘い、呉国第一の武芸者曾霄を破り、陸遜、呂蒙を血祭にあげて、父の仇をうつ。その後、劉備がみまかると、孔明は臥龍山に帰り、落胆した花関索も病を得て世を去る。残された三人の妻と多数の部下たちは、各々自分の出身地へともどり、軍団は瓦解、物語は終りを告げる。

#### （七）金文京氏の仮説

説唱詞話本『花関索伝』の内容は以上のとおりです。これによって明らかのように、これは初めから終わりまで「関索」という人物に関する英雄物語であり、『三国志演義』とは殆ど関係のない別箇の物語です。そこでは「関索」の方が父親の関羽以上に大活躍し、劉備や張飛に至っては脇役同然、さらに孔明までもが、いわば付随的に登場しているに過ぎません。これは、従来の『三国志演義』の枠組みを大きくはみ出した、もう一つの「三国志」世界の存在をわれわれに知らしめるものであり、既に失われてしまった「関索」伝説の片鱗を伝えるものであると考えられます。

ところで、先に挙げた「関羽の息子と孫悟空」と題する論文の中で金文京氏が注目したのは、「関索」なる人物に賦与されている、「剣の英雄」・「小童」・「水神」という3つの特徴でした。具体的に言えば、まず、剣の英雄ということに関しては、呉軍に追われた関羽が玉泉山に逃げた際、愛馬である赤兎馬が関羽の剣を背負ったまま水中に沈んでしまいます。それを見た関羽もまた死んでしまうわけですが、父の死を知った関索が父の仇を討つにあたって、父の亡魂が現れ、水中に沈んだ刀を引き上げて闘うように啓示を与えるところなど、関羽とその息子関索がいずれも剣の神としての属性を背負っていたことを証明するものと思われれます。次に、小童に関してですが、『花関索伝』後集において、

曹操の招宴に赴く際の関索に対する描写として、「上下不長四尺五（身の丈は4尺5寸にも満たず）」「身材不抵拳来大（拳よりも小さな体つき）」とあり、関索が極端に小さな体であったことを強調しています。また、水神的性格を帯びていることについては、花関索が靈力を得た経緯について、『花関索伝』前集において、山中の岩から流れ出ていた水をすくって飲んだことによって神通力を得たと述べられていることによって明らかです。

関索に備わる以上3つの性格を手がかりとして、金文京氏は更に、それがヨーロッパやユーラシア大陸、さらには東アジアにまたがる広範な地域に分布する剣神伝説・小童説話・水神信仰などと深く結びついたものであることを述べ、『西遊記』の孫悟空に賦与された属性とも共通点が見られることなどを鋭く指摘した後、『花関索伝』のもつ文学史上の意義について以下のように結論づけています。

『花関索伝』は、一人の英雄の活躍を、その生から死に至るまで描いた英雄叙事詩である。周知の如く、中国はヨーロッパや日本のようなまとまった神話をもたず、その文学はフィクションよりは事実を重んずる態度を、常に正統としてきた。ヨーロッパ文学を、神話から英雄叙事詩を経て小説へと展開する流れとおおまかに把握することが可能であるとすれば、中国は断片的な神話を伝えるのみであり、英雄叙事詩と称するに足る作品は皆無に等しい。（中略）その意味では、『花関索伝』のもつ文学史上の意義はきわめて重大であるとしなければならない。それは中国におけるほとんど絶無僅有の英雄叙事詩であった。元代に生まれたこの物語が、その後まもなく地中に埋没し、五百年の時を隔てて再びその姿をあらわしたという事実は、中国においてこの種の作品がいかにかに成立しがたく、伝承されがたいか、換言すれば、この種の文学の発生と流伝を阻む儒教的文学意識がいかにかに強固であったかを証明するものにほかならない。

（金文京「関羽の息子と孫悟空（下）」90頁）

（八）小川環樹氏の反応と賛辞

「関索物語」が中国に残存した類稀なる英雄叙事詩であるとする金氏のこうした見解を読んだ小川環樹氏は、金氏論文が掲載されたものと同じ雑誌『文学』1986年54巻9号の「文学のひろば」に短文を寄せ、金氏の論証によって年来の疑問がある程度氷解したことを喜ばれ、金氏の論考に対して次のような評価を下しています。

金氏の論考は「花関索伝」が含む種々のモチーフを分析し、かくの如き人物は或る特殊な説話の伝承の中で成立したことを明らかにする。（中略）しかし、著者金氏が力説するのは、「花関索伝」を説話として見れば、剣神一剣の英雄一の主要なモチーフと、サルマート族の伝承したナルト神話との深いかかわりである。その部族の一つアスマまたはオセットとよばれる集団は元の時代にはモンゴルの近衛兵に加えられ、フビライの雲南征服においても活動したことから、彼らの集団によってその神話が中国にもたらされたとの仮説を立てる。（中略）関索をまつる廟が雲南の処々に在ったことは、彼を主人公とする伝説が先ずその地域で発生したことを想わせるものだが、アス族の軍団が雲南の各地を転戦した事実は金氏の説の有力な支持をなすであろう。

（小川環樹「関索物語について」『文学』1986年9号、53頁）

また、1989年にわれわれが共同研究の成果として上梓した『花関索伝の研究』にも序文を寄せていただき、そこでも次のように述べて金氏の仮説を強く支持しておられます。

この物語は正史『三国志』または小説『三国演義』のストーリーを熟知する読者へは、腹立たしい程の荒唐無稽の感じを与えるであろう。主人公の花関索は名将関羽の第二子という点だけで、『演義』の話に挿入されたが、『花関索伝』の中では、彼は父にもまさる超人的武勇をもって暴れまわる。

その行動の大部分が、しばしば『演義』の叙述と矛盾し衝突する。ところが、ひるがえって冷静に考えてみるならば、この不合理な筋立ては、正にこの物語がもともと『三国志』の史実から派生したものでなく、まったく独立して発生した或る説話から出ていることを示すものである。物語の処々に現れる奇怪なモチーフ、ヒーローの異常な行動は、或る神秘性を伴なう。そこに隠された神話的意味は、中国だけではなく、歐洲の諸民族のあいだに伝わる説話のそれと比較されるべきものである。(中略) 金氏は本書の解説においては更に進んで、中国の或る地域で近代まで上演されていた芸能の中に、この花関索を主人公とするものが有ることに言及する。そして結論として、これらの物語などの背後に一つの英雄叙事詩というべきものの存在を想定する。中国には、その種の叙事詩(Epic)が全然無かったというのが文学史家の常識であった。敢えてその常識を超えようとした金氏の識力と、その説を裏づける綿密な考索とは、全体として高く評価されるべきだと、私は思う。(『花関索伝の研究』小川環樹「序」)

#### (九)『花関索伝の研究』出版に対する反応とその意義

以上申し上げましたように、1973年に上海博物館から出版された『説唱詞話花関索伝』は、金文京氏を中心とする東京在住の5人のメンバーの手で解説され、1989年、校訂文とともに『花関索伝の研究』として出版されることによって日本の学界に本格的に紹介されたわけですが、金文京氏の脳裏に浮かんだ壮大な構想に対しては、先程述べましたように、いち早く『三国志演義』研究の専門家である小川環樹氏の賛同が得られ、それによって数年間にわたるわれわれの読書会にも一定の意義が認められた形になったわけです。また、校訂本出版後間もなく、小川環樹氏以外にも、私たちの共同研究の成果を価値あるものとして評価する書評が幾つか書かれました。例えば、中国古典小説の理論的研究家として知られる神奈川大学教授・鈴木陽一氏は、89年の『東方』98号誌上に「通俗文芸研究者必読の書」という副題を付して「『花関索伝の研究』を評す」という極めて好意的な書評を掲載していただきましたし、さらに、同じく日本



における中国古典小説研究の第一人者とも言うべき埼玉大学教授・大塚秀高氏も、自らが中心となって発行している『中国古典小説研究動態』第3号誌上に座談会記録を載せ、金氏への賛辞を交える形でわれわれの研究成果を広く斯界に紹介していただきました。

1989年1月に『花関索伝の研究』を出版した当初は、長年にわたる努力がようやく報われ、読書会の成果を一冊の研究書として公表できたことを単純に喜んでいるばかりでしたが、しばらく時間が経って、その後の『三国志演義』研究の進展を見た限りでは、該書の公刊には少なくとも二つの大きな意味があったように思われます。一つは、金文京氏が縷々力説するように、「関索」の物語が決して閉じられた中国的世界の中だけで発生したものでなく、外来の神話的・説話的要素を多分に含んでおり、従って、この物語の中に、既に失われた英雄叙事詩としての数少ない片鱗を見出すことができることが証明されたこと。そしてもう一つは、架空の人物である「関索」の素性を探求する過程で、それまであまり重要視されてこなかった、『三国志演義』の版本とその系統に対する学界の興味が新たに喚起されたことです。日本では、『水滸伝』に対しては、比較的早くから版本研究が進んでいましたが、こと『三国志演義』に関しては、恐らくはそれが歴史小説であるという先入観も手伝ってのことかと思われませんが、既に触れましたように、小川環樹教授が少し疑念を留められた程度で、現存する版本全てを詳細に調査してその変遷過程を明らかにしようとする研究者はいませんでした。ところが、「関索」の素性を調べる過程で、従来大同小異だと思われていた『三国志演義』の各種版本間にも、実は予想を超える相違点が色々と存在することが明らかとなり、箇々の版本を逐一再調査する必要が出てきたのです。そして、学界に生起したそうした版本研究への新たな潮流は、私個人にとっても、その後の研究の方向に対して決定的な意味をもつことになりました。

自らが関わった書物に対して自分でその意義を吹聴するのは、些か自画自賛の誹りを免れないかもしれませんが、しかし、少なくとも私自身にとっては、校訂本出版が決定的な機縁となって、その後の10年間にわたる『三国志演義』

研究の端緒が開かれたわけですから、そこに大いなる意義を見出さざるを得ません。この点についてもう少し具体的にお話したいと思いますが、今回は既に予定の時間を過ぎておりますので、詳しいお話は次回にまわしたいと思います。本日は長時間にわたる御清聴、ありがとうございました。

(以上)

(資料)

### 関索・花関索関係文献目録 (稿)

(井上泰山 2007.3.11 作成)

#### 【1930年代】

- 1 余嘉錫「宋江三十六人考實」(賽關索王雄)：『輔仁學志』第8卷第2期, 1939

#### 【40年代】

- 2 王古魯「小説瑣記」：『藝文雜誌』第1卷第6期, 1943

#### 【50年代】

- 3 周紹良「關索考」：『周叔弢先生六十記念論文集』, 1951

#### 【60年代】

- 4 小川環樹「關索の伝説そのほか」：岩波文庫『三国志』第8冊附録, 1964

#### 【70年代】

- 5 趙景深「談明成化刊本“説唱詞話”」：『文物』第11期, 1972
- 6 趙景深「明成化本南戲白兔記的新發現」：『文物』第1期, 1973
- 7 汪慶正「記文學, 戲曲和版畫史上的一次重要發現」：『文物』第11期, 1973
- 8 『明成化説唱詞話叢刊』：上海市博物館, 1973
- 9 尾上兼英「『成化説唱詞話』試論(一)～『花関索傳』をめぐって～」：『東洋文化』第58号, 1978
- 10 爾泗「明成化刊本『説唱詞話』之發現」：『戲劇藝術論叢』第1輯, 1979
- 11 曾永義「明成化説唱詞話十六種～近年新發現最古的詩讚系説唱文學刊本」：『中

外文學』第8卷第5期，1979

【80年代】

- 12 胡士瑩「明代的說唱詞話叙錄」：『話本小說概論』381～395頁，1980
- 13 丁宗一「對『明代成化刊本「說唱詞話」之發現』一文的兩點辨正」：『戲劇藝術論叢』第3輯，1980
- 14 譚正璧·譚尋「明成化刊本說唱詞話述考」：『文獻』第3輯，1980
- 15 譚正璧·譚尋「明成化刊本說唱詞話述考（續完）」：『文獻』第4輯，1980
- 16 劉體超等「關索戲」：『雲南戲曲曲藝概況』（雲南人民出版社），1980
- 17 羅錦堂「花關索傳說考」：『中外文學』第9卷第9期，1981
- 18 丘振聲「『全像通俗三國志傳』中的關索」「宋代關索何其多」「關索在西南」「『詞話』中的關索」：『三國演義縱橫談』（瀋江出版社），1983
- 19 譚良嘯「『花關索傳』對『三國演義』研究的啓示」：『三國演義研究集』（四川省社會科學院出版社），1983
- 20 氷上正「“花關索”研究ノート」：『無名』4，1984
- 21 薛若鄰「關索戲與關索」：『戲曲研究』第12輯，1984
- 22 柳存仁「伍伯與花關索」：『清華學報』新16卷第1，2期合刊，1984
- 23 古屋昭弘「說唱詞話『花關索傳』と明代の方言」：『中國文學研究』第10期，1984
- 24 周村「成化本說唱『花關索傳』的本色，變異及其淵源」：『評彈藝術』（中國曲藝出版社）第3集，1984
- 25 A. E. McLAREN Chantefables and the textual evolution of the *San-kuo-chih yen-i*, T'oung Pao LXXI, 1985
- 26 顧峰「一支獨特而稀有的儺戲～關索戲」：『戲劇藝術』第3期，1985
- 27 金文京「關羽の息子と孫悟空（上）」：『文學』（岩波書店）第54卷6号，1986
- 28 金文京「關羽の息子と孫悟空（下）」：『文學』（岩波書店）第54卷9号，1986
- 29 金文京「關羽之子與孫悟空～明成化本說唱詞話『花關索傳』的神話意義」：『中外文學』第15卷第4期，1986
- 30 小川環樹「關索物語について」：『文學』（岩波書店）第54卷9号，1986
- 31 朱一玄「『花關索傳』校點記」：『三國演義學刊』2，1986

- 32 王兆乾「池州儺戲與明成化刊本『説唱詞話』」：第二屆全國古代戲曲學術討論會論文，1986
- 33 王兆乾「從貴池對昭明太子的祭祀看儺戲的形成」：全國儺戲學術研討會論文，1987
- 34 雲南省澱江縣文化局「雲南澱江關索戲」，1987
- 35 松家裕子・金文京「『成化本説唱詞話』發見簡報」：『東方』85号，1988
- 36 井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘『花關索傳の研究』：汲古書院，1989
- 37 小川環樹「『花關索傳の研究』序」：『花關索傳の研究』（汲古書院），1989
- 38 立間祥介「『花關索傳』の「花」と「少年浪子」」：『藝文研究』第54号，1989
- 39 鈴木陽一「『花關索傳の研究』を評す～通俗文芸研究者必読の書」：『東方』98号，1989
- 40 大塚秀高・金文京等「『花關索傳の研究』をめぐって」：『中国古典小説研究動態』3，1989
- 41 金文京「『三國演義』版本試探～建安諸本を中心に」：『集刊東洋学』第61号，1989
- 42 中川諭「『三國演義』版本の研究～毛宗崗本の成立過程」：『集刊東洋学』第61号，1989

**【90年代】**

- 43 中川諭「嘉靖本『三國志通俗演義』における「關羽の最期」の場面について」：『文化』（東北大学文学会）54卷1，2号，1990
- 44 上田望「『三國演義』版本試論～通俗小説の流伝に関する一考察」：『東洋文化』71，1990
- 45 上田望「明代における三國故事の通俗文芸について～『風月錦囊』所収『精選續編賽全家錦三國志大全』を手掛かりとして～」：『東方學』第84輯，1992
- 46 中川諭「『三國志演義』版本の研究～建陽刊「花關索」系諸本の相互關係」：『日本中國學會報』第44集，1992
- 47 中川諭「『三國志演義』版本の研究～「關索」系諸本の相互關係」：『集刊東洋學』

私と『三国志演義』研究（上）（井上）

第69号, 1993

48 丸山浩明「余象斗本考略」：『二松学舎人文論叢』50輯, 1993

**【2000年以降】**

49 上野隆三「包拯出生伝説と花關索」：『興膳教授退官記念中国文学論集』（汲古書院), 2000

50 上田望「雲南關索戯とその周辺」：『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第6輯, 2003

51 宮紀子「花關索と楊文広」：『汲古』46号, 2004